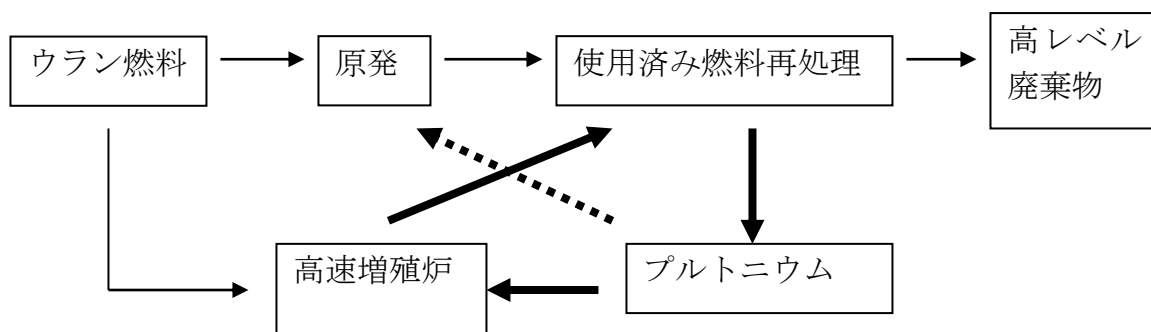


————— チェルノブイリ原発事故の残したもの（その3） —————

すでに何度も書いたが、原発の燃料ウランは石炭や石油と同じ地下埋蔵資源で、このまま使い続けられればあと40年ほどでなくなる。そこで、ウランの中でも燃えないウラン（ $U238$ ）を原子炉の中で燃えるプルトニウム（ $Pu239$ ）に替えることが出来れば、ウラン資源の有効寿命は約100倍にのびると科学者たちは考えた。それを実現するのが高速増殖炉と使用済み燃料の再処理である。この夢の原子炉（日本では「もんじゅ」）と再処理の組み合わせは「核燃料サイクル」と呼ばれる。だが、実験が進むにつれてその夢は敗れ、実現不可能な夢を見つづけているのは今や世界中で日本だけである。何故、日本は核燃料サイクルに固執するのか。

核燃料サイクル略図



燃えないウランから燃えるプルトニウムを作り出すはずの高速増殖炉は、実際にやってみると、増殖どころか、却って燃料のプルトニウムが減少したり、増殖（倍増）には100年以上かかったり、という代物だった。「もんじゅ」も設計上は燃料倍増に90年かかる。この時間を短縮出来ないわけではないが、それは増殖炉が限りなく原爆に近い炉心構造になり、暴走事故を起こす危険が増すことである。結局、日本を除き世界中で高速増殖炉の開発は放棄された。

アメリカはチェルノブイリ事故に先立つ1983年にクリンチリバー高速増殖炉計画を放棄している。それ以前に、すでに完成していた再処理工場も解体した。経済性がないばかりか核拡散につながる、というのが主な理由である。結局、目標の「サイクル（図の太矢印）」は断たれ、通常原発から出る使用済み燃料を再処理すれば、プルトニウムと高レベル廃棄物だけが残ることになった。プルトニウムは勿論、長崎原爆の材料と同じ物である。日本は、この

邪魔者のプルトニウムを、通常原発で燃やす「プルサーマル」をやって燃料を節約する、と言い訳している。プルトニウムを保有するのは危険なことなのである。アメリカが北朝鮮を敵にするのは、北朝鮮が再処理工場を作った実績があるからである。現在、イランの核開発が話題だが、イランは通常原発の開発だと主張している。にもかかわらず、アメリカを中心とする西欧諸国は、イランの意図は危険な核開発だと決め付けている。だが、考えてみると良い。日本はすでに青森県六ヶ所村で核燃料濃縮工場も稼働中で、まもなく「再処理工場」も稼働させようとしている。立場が違えば、これほど危険な国はないはずである。日本はその気になればいつでも核兵器を作れる技術と材料を持っている。西欧諸国が日本を危険視しないのは、核兵器を禁止し、IAEA（国際原子力機関）の査察を受け入れているからである。しかし、核燃料サイクルを持つ限り、日本も核保有の疑念を晴らすことは出来ない。（河田）